

2 研究の実際

(2) 本研究における考え方

ア 「領域や分野の関連を図る題材構成の工夫」について

〈研究の視点〉 1

児童が、「音楽の縦と横の関係」を聴き取り、感じ取ったことを表現に生かすことができるように、領域や分野の関連を図った題材構成を工夫する。

本研究では、〔共通事項〕の内容のうち、平成24年度実施の小学校学習指導要領実施調査で、教師の指導や児童の習得が難しいことが明らかになった「音楽の縦と横の関係」を取り上げます。そして、児童が「音楽の縦と横の関係」を聴き取り、感じ取ったことを表現に生かすことができるように、領域や分野の関連を図った題材構成を工夫します。題材は、「音楽の縦と横の関係」を生かすのに適していると考えられる「和音の美しい響きを味わおう」（第6学年）で行います。

題材構成の工夫は、次の2点で行います。

① 領域や分野の組合せと配列の工夫

領域や分野の組合せの工夫



表現領域における3分野の組合せ

本研究では、児童が「音楽の縦と横の関係」を聴き取り、感じ取ったことを表現に生かすことができる児童の育成を目指します。そこで、図1のように、様々な音楽活動の中で、聴き取り、感じ取ったことを表現に生かすことができるように、表現領域における「歌唱」「器楽」「音楽づくり」の3つの音楽活動を取り上げ、それら3つの分野で題材構成をすることとします。

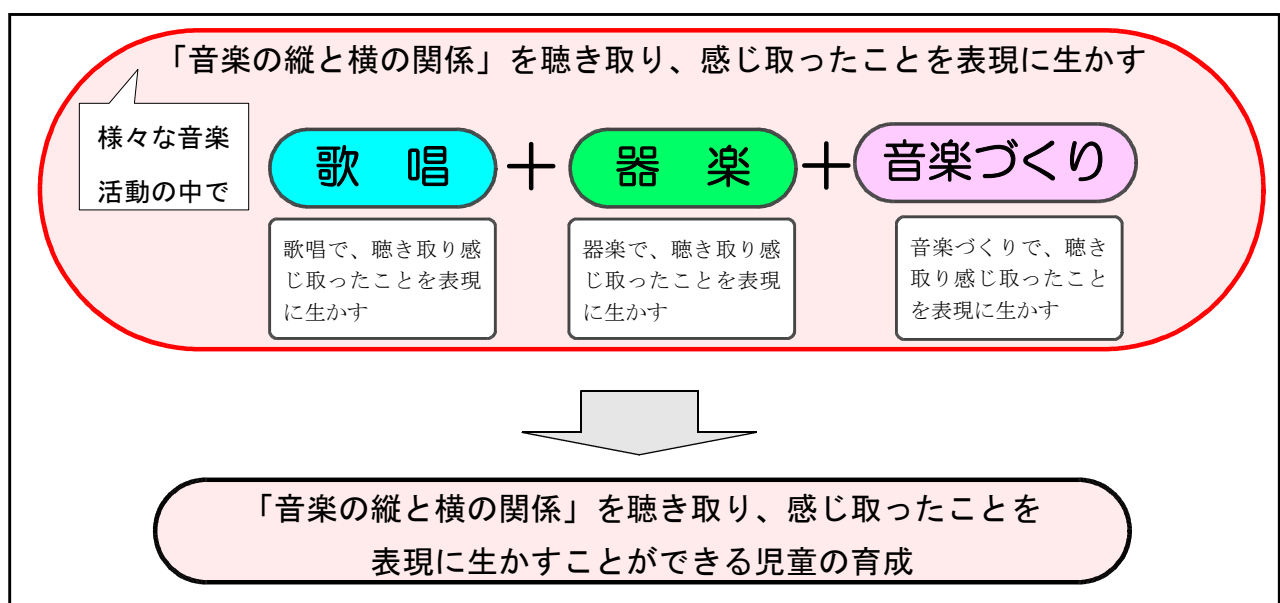


図1 領域や分野の組合せの工夫

配列の工夫

平成24年度に実施された小学校学習指導要領実施調査では、「歌唱の表現を工夫し、音楽表現に対する思いや意図をもつ問題」の通過率が63.2%でした。また、「器楽の表現を工夫し、音楽表現に対する意図をもつ問題」の通過率は、62.1%でした。このことから児童は、器楽よりも歌唱の方が、比較的、聴き取り、感じ取ったことを表現に生かしやすいと考えられます。学校現場においても、歌唱に日常的に取り組むことが多いことから、児童は、器楽よりも歌唱の学習に取り組むやすいと考えられます。そこで、図2のように、「歌唱」から学習を始め、次に「器楽」へと学習を広げたいと考えます。

一方、「音楽づくり」については、同調査において、「音楽づくりの指導内容は『児童が身に付けやすい』と

肯定的な回答をした教師がわずか2割だったことから、「音楽づくり」の学習は、困難な傾向にあると考えられます。そこで、「音楽づくり」の指導が単独にならず、「歌唱」や「器楽」で学んだことを「音楽づくり」の学習で生かすことができるように題材構成を工夫したいと考えます。具体的には、「音楽づくり」を題材の終末に位置付け、題材を通して学んだ音楽表現を「音楽づくり」に生かして取り組むことができるようにします。

(参考:国立教育政策研究所 『小学校学習指導要領実施状況調査教科当別分析と改善点(音楽)』平成27年2月)

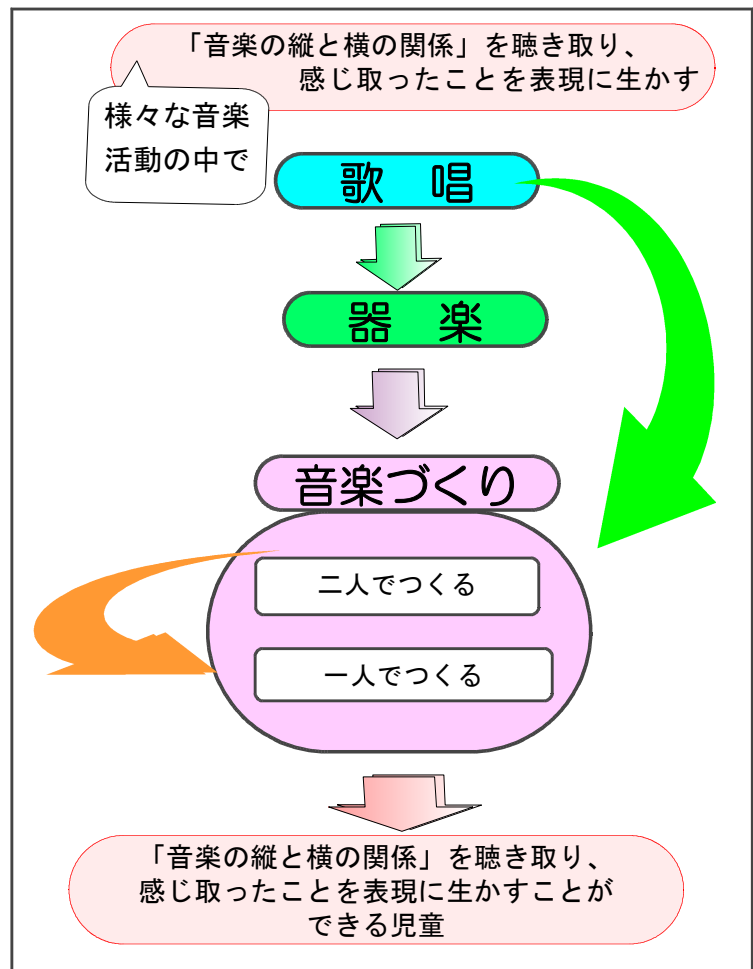


図2 配列の工夫

② 「音楽づくり」における指導の過程の工夫

「音楽づくり」は、表したい音楽について、音楽表現を見いだすことが難しい傾向にあり、特に「音楽の縦と横の関係」を取り上げた音楽づくりは難しいと考えられます。そこで、本題材においては、音楽づくりに繰り返して取り組むことができるようにし、1回目は「二人でつくる」、2回目は「一人でつくる」というように指導の過程を工夫します。(図2参照)

(2) 本研究における考え方

イ 「聴き取り、感じ取ったことを表現に生かす」 ことについて

〈研究の視点〉 2
 児童が、「音楽の縦と横の関係」を聴き取り、感じ取ったことを表現に生かすことができるように、発問を工夫する。

「音楽科、芸術科（音楽）における学習過程のイメージ」⁽¹⁾を具現化する際、教師がどのような発問をするかによって、学びの方向性が決まっていきます。そこで、次のような発問をします。

聴き取り、感じ取ったことを表現に生かす4つの発問

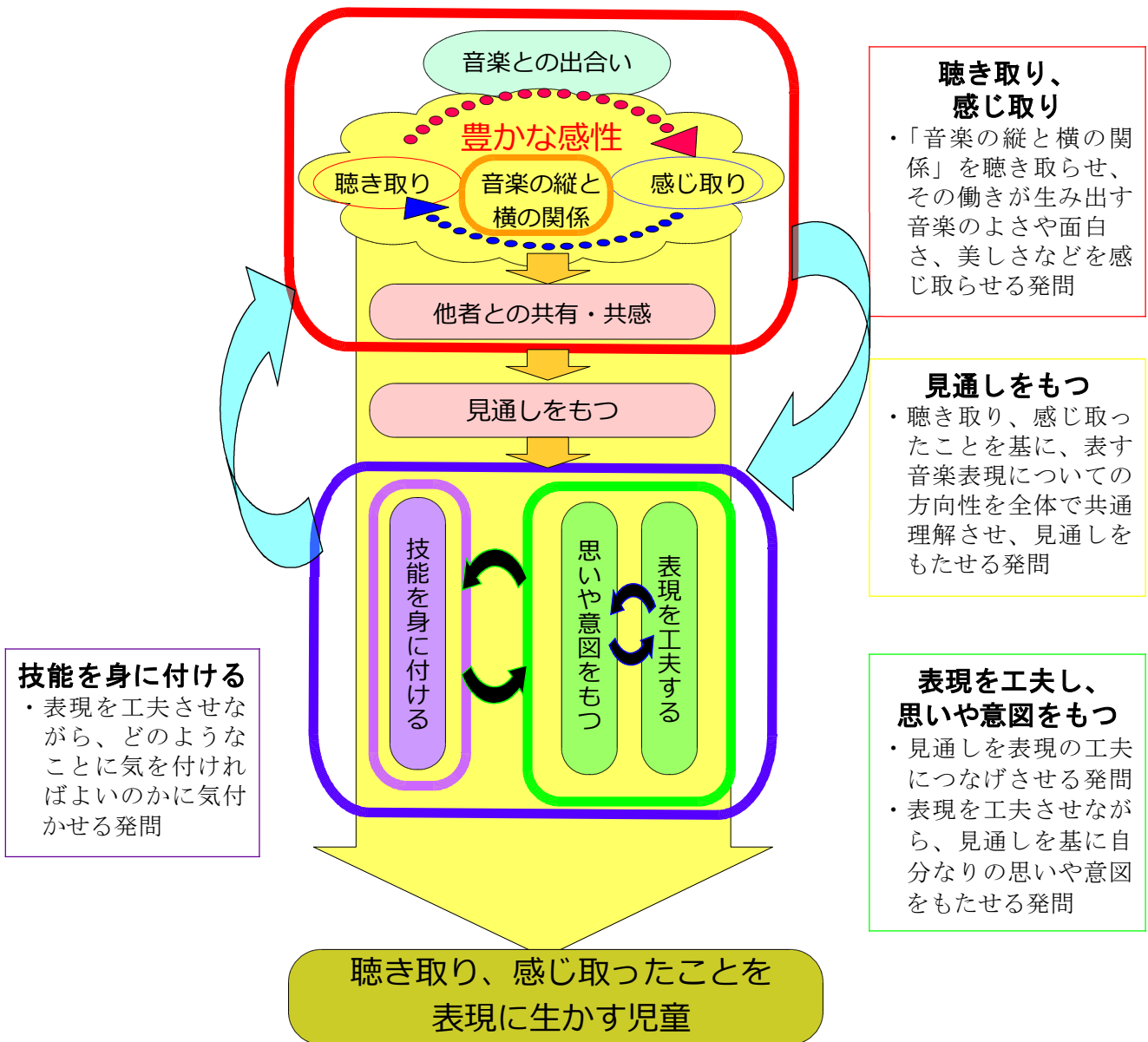


図3 発問計画

聴き取り、感じ取ったことを表現に生かすための発問の工夫

聴き取り、感じ取り

発問の工夫①

「聴き取り、感じ取り」では、「音楽の縦と横の関係」を聴き取り、その働きが生み出す音楽の構造のよさや変化の面白さ、響きの美しさなどを感じ取らせる発問をします。その際には、児童が「音楽の縦と横の関係」に着目できるように、2つの音楽を比較聴取させたり、楽譜で旋律の動きを確認させたりする活動などを取り入れながら発問を工夫する必要があると考えます。また、児童が、感動を伴って、豊かに感じ取ることができるように、写真を提示したり生活経験を想起させたりしながら発問することも大切だと考えます。発問例としては、「音楽を聴いて、どんな様子を思い浮かべましたか。それは、なぜだと思いますか」などが考えられます。

見通しをもつ

発問の工夫②

「見通しをもつ」では、児童が聴き取り、感じ取ったことを基に、表現の工夫についての方向性を全体で共通理解させ、表したい音楽表現に見通しをもたせる発問をします。表現の工夫の方向性が定まることで、児童は、題材のねらいに迫る学習のめあてをもって表現の工夫に取り組むことができるようになります。また、表したい音楽の方向性が全体で共通理解できることで、児童はよりよい表現を目指して互いに感想を伝え合い、工夫を高め合うことができるようになりますと考えます。特に合唱や合奏では、全体での見通しをもたせることは協働的な学びを効果的に進めることにつながると考えます。発問例としては、「どのような歌い方をしたいですか」などが考えられます。

発問の工夫④

「技能を身に付ける」では、表現を工夫させながら、どのようなことに気を付ければ、よりよい音楽表現になるのかについて思考判断しながら気付かせる発問をします。そのことにより、児童は試し演奏をしたり、相互に助言を行ったりしながら、表現の工夫と技能を結び付ける要領を見つけ出すことができるようになりますと考えます。発問例としては、「どのようなことについて、工夫を重ねる必要があると思いますか」「どのようなことに気を付けて演奏すればよいと思いますか」などが考えられます。

技能を身に付ける

発問の工夫③

「表現を工夫し、思いや意図をもつ」では、見通しを基に、児童が表現を工夫する中で、自分なりの思いや意図をもつことができるような発問をします。その際は、見通しを表現の工夫につなげるための発問や、全体でもった見通しを、自分なりの具体的な思いや意図につなげていくような発問の工夫をする必要があると考えます。また、児童が相互に表現の工夫を学び合うことができるように発問を工夫することも大切だと考えます。発問例としては、「どこを、どのように演奏したいですか」などが考えられます。

表現を工夫し、思いや意図をもつ